

国語 (その一)

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

歴史学にも歴史があり、それぞれの時代に遵守すべきとされてきた歴史研究の形がある。まず最初に時代を大きく遡って、「歴史学の歴史」の要点を簡単に振り返ってみよう。

古代からこの方、^A歴史を描いてきた者(歴史家)というのは、それが「歴史」「年代記」「編年史」その他、いずれの名を付けられた作品であろうと、自分の書いたものが「作り話」や「虚構」とけっして混同されることのないよう、細心の注意を払ってきた。というのも、もしもそのようなレッテルを貼られてしまうと、そこに描き出された対象は、たちまち現実性を失ってしまうからである。

ところがまた他方で、中世以前の西洋においては、「歴史」は「記憶」から明確に区別されていなかった。それどころか正しい記憶者／記録者こそが、優れた歴史家なのであった。たとえば、ギリシャの^(注1)ヘロドトスや^(注2)ツキジデスにせよ、または中世ヨーロッパの世界年代記や都市年代記の作者にせよ、歴史家というのは、自分自身がある出来事・事件の目撃証人であるか、さもなければ少なくとも信頼のおける証人から直接聞いた出来事のみを記すべきであった。

X

かくして古代から中世末まで、歴史家とは一貫して記憶者／記録者、あるいは権威の盲信者であったのだ。だから、近代歴史学と不可分の「史料批判」というような厳密な手続きは存在しなかった。ただし中世人が何の検証もなしに歴史叙述をしていたわけではなく、修道院に豊富に収蔵された史料を、それなりの考証学的な構えで扱っていたことは、近年の専門研究によって確認されている。

ところが歴史と記憶との関係は、十五世紀から十八世紀にかけて徐々に、しかし最終的には一八〇度転換していった。すなわちこの時期に、人間の記憶はいくら生々しく直接的でその正確さを多くの人々が保証しようと、そのままでは歴史だと主張できなくなつたのである。言い換えれば、歴史家とは出来事を自ら目撃したり、信頼のおける証人から聴取したりする記憶者／記録者ではなくなった、ということでもある。というのも「史料」(主に文書)という、現実の出来事、の痕跡、媒体の存在が、歴史(学／叙述)の不可欠の構成要素として登場し、さらに「解釈」という営為こそが歴史家にとつてのもっとも大切な仕事で、その良し悪し^あが書かれた歴史の正しさを占う鍵になったからだ。

歴史の構成要素としての「史料」の登場で、歴史は一回性の語りではなく、おなじ史

国語（その二）

料を別様に検討して何度でも語り直し書き改めることができるようになった。歴史の反復・再生産が可能になったのである。その反面で、「私が実際にこの目で見た」という、生身の人間の直接の証言や記憶は、同時代史においてさえ、それ自体としては歴史の素材ではなくなってしまった。むしろその証言や記憶を記した調書とか、日記・手紙とか、あるいは絵や写真とかといった「史料」をもとにしてこそ、歴史が描けると考えられるようになったのだ。

このようにして近代初頭に歴史学の「イ」に躍り出た史料は、残されたその大半が、国家をはじめとする諸権力によって産出されたものであった。それゆえ、十八世紀後半から十九世紀後半においては、国制、外交、戦争、条約、革命、権力闘争など、政治的出来事や制度の記述が歴史家の目標となり、それを国家当局も後押しした。そして十九世紀には、^(注3) アンシャン・レジーム期の貴族に代わってブルジョワが政治・社会のエリート層を構成するようになるが、彼らを代弁する歴史家たちは、歴史の新しい解釈の上に政治的権威を据えることで、ブルジョワが主導する国民国家を正当化しようとした。国民国家こそブルジョワの第一の帰属の場所、アイデンティティの拠り所だとされたからである。

この十九世紀には、ヨーロッパ各国で科学的歴史学への志向が強まり、いわゆる実証主義的な歴史学の手法とそれに伴う^B歴史学の機能の変化が起きた。たしかに近代歴史学は、国民国家の実質的な建設、ナショナリズム高揚の機運と歩みをともにし、国家の後ろ盾があつて成長していったので、国家の利益に叶い、その権威発揚に役立つものだったともいえるが、歴史家たちの意識としてはそのために科学としての歴史学を歪めようという考えはまったくなかった。むしろ歴史は何かの役に立つことを直接目的とせず、しかも広い国民との間のパイプを塞いで、大半、大学に属する狭い学者サークル内で研究が行われて相互に批判し合う専門ジャンルへと変貌したのである。

それ以前には、古代から一貫して「実用的な過去」と重なり合うようにして考究され、個々の市民が人生を生き抜くため役に立つものであった役割が一変して、唯一、目標は真実探求に向けられるようになったのである。大学などでは、国家を支えるエリート養成に益するプログラムが組まれ、当局もそれに肩入れしたが、専門の歴史研究者の方は、専門性を守りアマチュアへの優位を確立するための規則と慣習を練り上げていった。その結果歴史家になるには、素人芸ではたどり着けないような長期にわたる専門教育が必要になったのである。またこの頃より、歴史学は他分野の学問のうち撰取できるものは何でも取り入れようと念じた。たとえばドイツの古代史家B・G・ニーブル（一七七

国語 (その三)

六一―一八三一年)が大筋を示した歴史学の方法は、解釈学、比較文法学、言語学などの成果を結びつけたものであり、さらにその後は、より広い(隣接)諸科学からの成果を援用しようとする態度が目立ってきた。

そしてまた、十九世紀後半になると新しい歴史分野が台頭してきた。つまりその頃から一九七〇年代まで、国制史・政治史の傍らに、社会経済史が歴史学のもう一つの主流としてのし上がってきたのである。十八世紀後半以降十九世紀にかけて、イギリスを先頭に、フランスやドイツでも産業が発展し、農村社会から資本主義的工業社会へと大きく転換するとともに、労働問題が深刻になり、社会的矛盾も先鋭化した。するとその原因を過去に遡って探り、現状への処方箋を提示できる経済史ないし社会経済史が、歴史のもつとも主要な分野と考えられるようになった。そして相対立する社会階級こそが歴史を動かす中心的なファクターとして、注目を集めたのである。

また高度資本主義時代を迎えた一九七〇年代からは、人類学的な社会史・文化史が大きな飛躍を遂げる。その社会史は、エリート中心ではなく、庶民の日常生活と社会関係に注視し、また文化史はかつてのような一握りの思想家・芸術家・作家の作品研究とは違って、裾野を一気に拡大し、民衆文化論とか心性史という形で、権力を持たない者たち、自分の言葉を持たない者たちをも対象とするようになってきた。

さらにこの二〇―三〇年には、「オーラル・ヒストリー」という歴史ジャンルが脚光を浴び始めた。歴史的な出来事に際会した人物の肉声あるいはそれをマイクで拾った「声」が、歴史学の「資料」として脚光を浴びるようになったのである。それは録音機器の発達という技術的側面と、資料(史料)の多様化傾向、および現代史／現在史に重きをおく趨勢と絡んでいよう。歴史と記憶との関係が、再び不明確になり、再考が必要になっているようだ。

加えて近年では、歴史学がいくつもの危機に見舞われている。それは、一つには、「言語論的転回」により、歴史とフィクションの境界が融解させられたとの思い込みが広まるとともに、歴史家を自称する小説家やジャーナリスト、あるいは他分野の学者らが歴史の作り手集団の中に侵入しつつあること、二つ目は、社会諸科学の対象の広がりの中で歴史学独自の対象が見失われ、その副産物として歴史学がますます細分化しつつあるという(注4) ディシプリン自体の問題である。三つ目には、グローバル化の展開とともにいわゆるグローバル・ヒストリーが大盛況を迎えているが、これは西洋中心主義を脱した歴史像の提示やこれまで見落とされていた地球規模の接続や交流、そして新たな原因の剔抉(てっけつ)をもたらす意義がある反面、史料批判など伝統的な実証主義の歴史学の作法

国語 (その四)

を蔑ろにさせる怖れがある。そして四つ目は、国家間の懸案の「歴史問題」化やマスコミやテレビゲームの影響による歴史像の歪曲とその反復・固定化である。これは、歴史の民主化、歴史教育問題にも関わる。

(池上俊一『歴史学の作法』による)

(注1) ヘロドトス —— 古代ギリシャの歴史家。

(注2) ツキジデス —— 古代ギリシャの歴史家。

(注3) アンシャン・レジーム —— フランス革命前の絶対君主制とそれに対応する封建的な社会体制のこと。

(注4) デイシプリン —— 学問分野のこと。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部A「歴史を描いてきた者(歴史家)」とあるが、この者の在り方が大きく変化したと本文で説明されている。その変化がどのようなものを、五十字以内(句読点なども字数に含む)で説明しなさい。

問二

X

 に入る、次のA～Eの四つの文の正しい並べ方として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

A そうした権威の言葉は検証に付されることなく、崇め信じられるものであったのである。

I そのときにその遠い昔の出来事を「歴史」として保証するのは、聖なる権威(聖書)であり、あるいは古代の権威(哲学者・教父)であった。

U もちろん同時代の出来事ばかりでなく、自分の生まれるはるか前、ときには何百年何千年も昔のことを歴史として記述するケースは非常に多い。

E 天地創造から説き起こす中世の「世界年代記」はその代表である。

① ウ→イ→ア→エ ② ウ→エ→ア→イ ③ ウ→エ→イ→ア

④ エ→イ→ア→ウ ⑤ エ→ウ→イ→ア

国語 (その五)

問三 空欄イに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | |
|---------------------------|--------|-------|
| ① 檜 <small>ひのき</small> 舞台 | ② 正念場 | ③ 修羅場 |
| ④ 表舞台 | ⑤ 晴れ舞台 | |

問四 傍線部B「歴史学の機能の変化」とあるが、歴史学はどのような機能を持つようになったのか。本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部C「脚光を浴び始めた」とあるが、この言葉の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- | | |
|----------------|---------------|
| ① 方法として用いられ始めた | ② 社会の中に横行し始めた |
| ③ 円熟の域に達し始めた | ④ 実績が急に上がり始めた |
| ⑤ 注目的になり始めた | |

問六 傍線部D「歴史学がいくつもの危機に見舞われている」とあるが、それは、たとえばどのような危機なのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① グローバル化の展開により、社会科学の対象が広がりを見せ、歴史学の対象がなくなりつつあるという危機。
- ② 実証主義という歴史学の手法をさらに洗練させたことで、西洋中心主義ではなくなってしまうという危機。
- ③ 歴史家だけが歴史を作るものではなく、歴史とフィクションとの境界が揺らいできているという危機。
- ④ 歴史を学校だけではなくテレビやテレビゲームで学ぶようになり、歴史学の役割が縮小してきたという危機。
- ⑤ 「史料批判」という厳密な手続きを取ることによって、伝統的な歴史学の作法がすたれ始めてきたという危機。

国語 (その六)

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 歴史学は、グローバル化が進展していくことで、歴史と記憶とが明確に区別されるものになっていった。
- ② 歴史学は、人類学的な社会史・文化史が勢いを増すことにより、対象とする事柄や人たちが変わっていった。
- ③ 歴史学は、近代に入り学問が細分化されて、社会経済史から国制史や政治史へと研究分野が変わっていった。
- ④ 歴史学は、高度資本主義時代を迎えたことで、科学的歴史学、客観的な科学としての歴史学になっていった。
- ⑤ 歴史学は、二十世紀において中心的役割がアンシャン・レジーム期の貴族からブルジョワになっていった。

国語 (その七)

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

私は小学生のころ、大阪万博のIBM館で初めてコンピュータというものを触って体験し「面白い!」と思い、それ以来、自分でテキストなどを読んでプログラミングを勉強した。いや、「勉強」という意識は少しもない。ただの趣味であり、遊びである。テキストといっても当時は子供向けのものなどまったくないので、NHKで放送されていた「コンピュータ講座」のテキストを取り寄せていたりした。【I】

コンピュータの実物は持っていないから、プログラミングといっても、紙に鉛筆で手書きするしかない。NHKのテキストには、原寸大のキーボードを印刷した折り込み^①ブロック^①がついていた。もちろん、指で押しても何も表示されない。コンピュータの実機に触れられる機会がないので、それを机の上に広げてタイピングの練習(?)をしるということだったのだろう。そんな時代だ。【II】

学校のテストが早く終わって時間が余ると、答案用紙の裏に^(注1)FORTRANプログラムのコードを書いたりしていた。先生は何のことだかさっぱりわからなかったと思う。でも、^②シカ^②られたことはない。「不真面目」だとは思われなかったからだろう。

【III】

今はそれを仕事にしているが、私自身の感覚は当時とほとんど同じだ。趣味と仕事の正確な区別はつけられない。与えられた課題に義務として取り組むのではなく、自分が楽しいからやっている。もちろん楽しくても楽なだけとはかぎらないが、ウォークマンの開発者も、きっとそうだったにちがいない。【IV】

真面目なイノベーションが「やるべきことをやる」ものとしたら、「やりたいことをやる」のが非真面目なイノベーションだ。ウォークマンが誕生した時代とくらべると、今はどちらかというと「真面目」路線の技術開発が注目されているけれど、これはどちらも無いといけない。【V】

たとえば^(注2)SDGsの^③力^③上げる一七の課題はたしかに正しいけれど(SDGsの意義には自分も^④サンドウ^④している)、これから人類が直面する問題がそれだけとはかぎらない。未来に何が起こるかは予測不能だ。

実際、本書を執筆している間にも新型コロナウイルスの感染が世界的課題となり、外出や移動が難しい状況になってしまった。そうするとテレプレゼンスやVR(バーチャ

国語 (その八)

ル・リアリティ)などによる遠隔共同作業が急に注目されるようになった。しかしVRの研究をしていた人が、感染症対策という課題意識を持っていたかというところでもないと思う。バーチャルな世界に入り込める体験を純粹に面白いと思って研究していたのではないだろうか。

現時点では誰もが「正しい」と認める目標が、数年後には意味をなさなくなる可能性もあるし、新しい課題が出現する可能性も常にある。だから、今の時点で「正しい」とわかっている課題の解決だけを目指せばよいというものではない。

また、私が^{A(注3)}スマートスキンを開発した二〇〇一年の時点で、二〇〇七年のiPhone誕生を予測した人はいなかった。わずか六年後の未来さえ、予測不能だったわけだ。

未来の予測ができなければ、当然、「どんな課題を解決すべきか」もわからない。「やるべきこと」が見えないのだから、課題解決型の真面目なやり方だけでは、B 予測不能な未来に対応するイノベーションを起こすことはできないだろう。

逆に、自分の「面白い」から始まる非真面目な行動原理は、最初は何の役に立つかわからなくても、それが役に立つような未来を切り拓いてしまうことがある。ある発明によって、誰も予想もしなかった楽しさや利便性が生まれるケースは少なくない。

これは、私のやっているような技術開発だけの話ではないと思う。

どんな仕事でも、常に新しいアイデアは求められるだろう。

そんなときは、真面目に課題を解決することだけではなく、自分の「やりたいこと」は何なのかを非真面目に考えてみるとよいのではないだろうか。そこから生まれたアイデアが新しい未来をつくる可能性は十分にある。

未来を予測して課題を設定し、「これからの世の中はこうなるはずだ。そしてこういう課題があるはずだ」と想像するところから始まるのが、課題解決型のイノベーションだ。しかしそれだけでは、想像の範囲内での未来しかつくることはできないかもしれない。想像を超える未来をつくるために必要なのは、それぞれの個人が抱く「妄想」だと私は思っている。

広辞苑を引くと、妄想とは「みだりなおもい。正しくない想念」「根拠のない主観的な想像や信念」などと書いてある。後者は病的な意味だ。いずれにしろ、ふつうはあまり イ なニュアンスでは使わない。

国語 (その九)

しかし私には、この言葉がしつくりとくる。誰も考えなかった新しい技術は、往々にして、人から「はあ？」と呆れられるような思いつきから生まれるものだ。ちよつとクレイジーな印象を与えることもあるかもしれない。

でも、他人にはすぐには理解されず、そのため広く共有もされない妄想であっても、本人はそこに何らかのリアリティを感じている。つまり、乗っている価値軸が違いうことだ。本人にとっては自然なことであって、□をてらって「不真面目」におかしなことを言っているわけではない。自分の価値軸の上で「面白い」と感じたことを、素直かつ真剣に考えている。

その「妄想Ⅱやりたいこと」を実現するには、いろいろな工夫や戦略が必要だ。ただ「やりたい、やりたい」と言うだけでは人に伝わらないし、そもそも妄想の段階では自分が何をやりたいのかよくわかっていないことも多い。

(暦本純一『妄想する頭 思考する手 想像を超えるアイデアのつくり方』による)

(注1) FORTRANプログラム — 1950年代に誕生した、世界初のプログラミング言語。

(注2) SDGs — 持続可能な開発目標のこと。

(注3) スマートスキン — スマートフォンの画面を指2本で広げたり狭めたりする技術のこと。

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 次の一文を挿入する場所として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

なぜなら、未来に何が起こるかをすべて予測することはできないからだ。

① 【Ⅰ】 ② 【Ⅱ】 ③ 【Ⅲ】 ④ 【Ⅳ】 ⑤ 【Ⅴ】

国語 (その十)

問三 傍線部A「スマートスキンを開発した」とあるが、このようなものを開発することのできたのはなぜだと筆者は考えているのか。その説明を行った次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を、本文中から三十四字で抜き出して答えなさい。

から。

問四 傍線部B「予測不能な未来に対応するイノベーションを起こすことはできない」とあるが、このようなイノベーションを起こすために必要なものは何だと筆者は考えているのか。本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問五 空欄イに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① ラジカル ② ダイナミック ③ アナーキー
- ④ ポジティブ ⑤ ナンセンス

問六 空欄ロに入れるのに最も適切な漢字一字を答えなさい。

問七 本文中に「非真面目」とあるが、これはどのような態度なのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① いまの社会が乗っている価値軸を壊して、自分が面白いと思っている価値軸を広めようとする態度。
- ② 社会の役に立つために、いままで誰も開発したことがないものを、先駆的に研究しようとする態度。
- ③ 課題を解決しようと考えている真面目な態度とは異なり、自分がやりたいことに集中している態度。
- ④ 何事にも真面目に取り組むことに反発して、それとは異なったことにあえて挑戦しようとする態度。
- ⑤ 真面目な態度とも不真面目な態度とも違い、価値軸が固定されていないため捉えどころがない態度。

国語 (その十一)

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 新しいアイデアを生むためには、学校では個性を重視して自分の好きなことを自由に学べるようにしなければならない。
- ② 昔と比べて現代では真面目な路線が尊ばれるが、イノベーションのためにはもっと不真面目にならなくてはならない。
- ③ ウォークマンやスマートフォンなど画期的なものを開発するには、小学校の時から好奇心が旺盛でなければならない。
- ④ 誰もが正しいと思っている目標ではなく、一部の人が正しいと認めているだけのものを研究する方が未来のためになる。
- ⑤ 想像を超える未来をつくるためには、解決しなければならない問題や、いまある考え方にとらわれていてはいけない。

国語 (その十二)

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

そもそもコミュニケーションとは何なのだろうか？ コミュニケーションというものを研究するうえで、私はひとまずこんな定義を念頭に置いている。誰かが何かをしたり、言ったりすることで何かを意味し、別の誰かがそれを理解したときに成立するもの、それを「コミュニケーション」と呼ぼう、と。そのうえで、「誰かが何かをしたり、言ったりすることで何かを意味する」とはどういうことだろう、と考えてきた。

「何かを意味するとは、要するに相手にその何かを信じさせようという意図のもとで何かをしたり、言ったりすることだ」。この考えは^A哲学者ポール・グライス (Paul Grice) により^①デিশヨウされ、あれこれと細かな修正を受けつつも、私が専門とする分析哲学という学問分野においていまでも支配的な見方となっている。何かを意味するというのは、ある特別な意図のもとで何かをしたり、言ったりすることであり、その意図の中身を見ればそのひとが何を意味しているかがわかる、というのがその基本的な発想だ。

『話し手の意味の心理性と公共性』(勁草書房、二〇一九年) という本のなかで、私はそうした考えかたがうまくいかないということを^Bねちねちと論じた。詳細は省くが、私が代わりに持ち出した枠組みをひとことで述べれば、「コミュニケーションというのは、イ約束をすることなのだ」となる。私が何かをしたり、言ったりして、それによつて例えば京都で蛍は見られないということの意味したとすると、それは「京都で蛍は見られないと信じている者として今後は振る舞うことを、私は約束したいと思います」とでもいうような呼びかけになる。そしてあなたがそれを受け入れたとき、私とあなたは「三木は京都で蛍は見られないと信じている者として振る舞うものと見なそう」と約束をしたことになる。それにもかかわらず私が初夏の京都で蛍を見ようとしたならば、約束を破ったことになり、あなたはきっと私を「嘘つき^{うそ}」だとか、「言っていることやっていることが合っていない」だとか、「不合理」だとかと非難するだろう。逆にあなたが私の意味したことをちゃんと受け入れておきながら、初夏のある日に「どうしたの？ 京都の蛍スポットを探したりしないの？」などと言ったとしたら、「私の言うことをまじめに聞いていなかった」だとか、「私を物の道理のわからないひとのように扱っている」だとかと、私は非難するだろう。

国語 (その十三)

何かを意味するとは特定の意図を持って何かをしたり、言ったりすることだという考えかたは、あるひとが何かをしたり、言ったりするとき、それによって何を意味しているのかについては、その当人が決めることができると思定と結びついている。自分が何を意味しているかを決めるのは自分自身だ、というわけだ。私の考えかたはそうではない。私が約束を持ちかけたとして、それがどのような約束だったのかは、必ずしも私の意のままに決められるわけではない。約束とはそういうものだ。私があなたに「借りていた本を返す」と約束をして、あなたがそれに同意したとして、それなのに翌日になっても、その翌日になっても一向に返す気配がなく、

甲

あなたが「返す」と言ったのだから早く返して」と責め立てたときに、私が「あのとき意図していたのは、どれだけ日が経ってもいいから、返したくなったら返すということだった」と抗弁したところで、あなたは納得しないはずだ。私はもしかしたら、本当にそうした意図を持っていたのかもしれない。

□ 約束は約束だ。「返す」と言ったら次に会ったときにでも返すのが普通であつて、それをしないなら私は不誠実だ、とあなたはきつと思うだろう。約束は、必ずしも約束を持ちかけたひとの自由にはならない。

約束するひとの考えと約束そのもののあいだには②カンゲキがある。ひとときには、自分がする気がなかった、それどころか自分では想像してもいなかった約束をしていたことになり、そしてその場合でも、約束は約束として、それに従うことを義務づけられ、それに反すると非難されるようになる。私はただ、あまりにしつこい③カンユウを追ひ払おうとして「いまは忙しい」と。あしらったつもりが、「いま」以外のいつかであれば話を聞くという約束をしたことにされてしまい、「別の日なら話を聞くと聞いたじゃないですか」などと余計にしつこく責め立てられ、やがては話を聞かざるを得ない羽目に陥ることがあるかもしれない。「聞かざるを得ない」？ なぜそんなことになるのだろう？ 私はそんな約束をしたつもりはなかった。しかし相手が私よりも力が強かったり、あまりに強情だったり、その気になれば私の仕事を妨げることができたりするならば、そんな約束をしたのだという相手側の言い分に、私が譲ってしまうこと、そうする以外に道が見出せないこともあるだろう。約束はときに、約束を持ちかけた本人にとつても思いがけず、望まれもせず、④デイクツすれば不利益をもたらすにもかかわらず結ばれることがある。約束の外側での、ひととひととの力関係によって。

国語 (その十四)

ここにコミュニケーション的暴力が現れる契機がある。コミュニケーションは、話すひとから聞くひとへの約束の持ちかけだ。しかし、コミュニケーションの外側での力関係によって、それがどのような約束であるかが、話している本人の望まないかたちで決められてしまったらどうだろう？ 望まない約束でも、それが何らかの意味で強いられたものであっても、約束は約束であり、それに従う義務が生じてしまう。話している本人が思ってもいなかったことを意味したことになり、そしてそれに従わないならば「嘘つき」だとか、「不合理」だとかと責められることになる。これを、私はコミュニケーション的暴力のひとつの典型だと考えている。話し手がその振る舞いや発言で何かを意味しようとしても、聞き手の力によって別の何かを意味したことにされ、その別の何かに従って約束が結ばれてしまう。聞き手が意味を独り占めしてしまう。私はこれを「意味の占有」と呼んでいる。

(三木那由他『言葉の展望台』による)

※ 問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部A「哲学者ポール・グライス」とあるが、彼はどのような考えかたを持っていたのか。本文中より四十一字で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部B「ねちねち」とあるが、この言葉の対義語を平仮名四字で答えなさい。

問四 空欄イ、ロに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

- ① いわば ② とはいえ ③ だから ④ むしろ ⑤ まして

国語 (その十五)

問五 空欄甲に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 居ても立ってもいられない
- ② 開いた口が塞がらない
- ③ 痺れを切らした
しび
- ④ 肩を落とした
- ⑤ 尻に火がついた

問六 傍線部C「あしらったつもり」とあるが、この言葉の辞書的な意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 強く拒絶したつもり
- ② いい加減に扱ったつもり
- ③ やんわりと意思を伝えたつもり
- ④ 遠回しに返事をしたつもり
- ⑤ 真面目に対応したつもり

問七 傍線部D「聞き手が意味を独り占めしてしまう」とあるが、これは例えばどのような場合に起こるのか。その説明を行った次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を、本文中から五十字で抜き出して答えなさい。

場合。

国語 (その十六)

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

- ① 言ったことを守らないと相手を傷つけることになるという意味で、コミュニケーションは暴力である。
- ② コミュニケーションには力関係が働き、力の弱い人は力の強い人の思いを察して話さなければならない。
- ③ 「何かをしたり、言ったりすることで何を意味するのか」は、したり言ったりした人にしかわからない。
- ④ ことばは曖昧なもので、言ったことが何を意味しているのかを確定することができないものである。
- ⑤ コミュニケーションとは約束のことなのだが、約束を持ちかけた人の自由にはならないものである。